



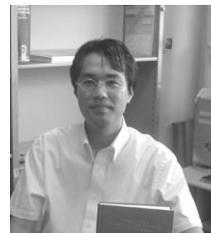
人間・環境学研究科 助教授

2004
October
10

勝又直也先生

▽勝又先生のプロフィール▽

京都大学大学院人間・環境学
研究科助教授、Ph.D., summa
cum laude



- 1994 東京大学文学部第三類卒業
- 1998 エルサレム・ヘブライ大学大学院ヘブライ文学研究科修士課程修了
- 2003 エルサレム・ヘブライ大学大学院ヘブライ文学研究科博士課程修了
- 2004 京都大学大学院人間・環境学研究科助教授

ヘブライ文学の魅力 —「マイノリティ文学」—

ユダヤ人は、紀元後から、現代でイスラエルという国ができるまでずっと自分の国を持たずにマイノリティとして、マジョリティである他者の支配の下で暮らしてきた民族です。多くの場合、話し言葉のレベルではマジョリティの言葉を使ったのですけれども、書き言葉、特に詩や文学においては常にヘブライ語で書き続けたわけです。ですから、彼らが生み出したヘブライ語やヘブライ文学というのは、マイノリティとしてのユダヤ人の、マジョリティに対しての微妙な立場を反映しているのではないかと思います。それを読み取る

というのがすごく魅力なわけです。

日本においてよくあるヘブライ語・ヘブライ文学のイメージは、聖書の言語としての、あるいは現代イスラエルという国ができてからのものだと思うんです。ところがそれらは、マイノリティではないユダヤ人が生み出した言語であり文学であるわけです。聖書とイスラエル国家の間には時間的には2000年にもわたる長い時間があり、地理的にはユダヤ人は世界中に散らばっていたわけで、言ってみればディアスポラ（離散）の歴史があるわけですね。その間にユダヤ人がヘブライ語で書いた文学の研究を本格的にやっている人はおそらく日本ではないと思います。その点でこれからやるべきこともあって、重要ですね。

ヘブライ文学というものをマイノリティとマジョリティの微妙な関係を反映するものと

して捉えるという研究は、ユダヤ人に限らず、他のマイノリティが他の地域や時代において生み出した文学の研究にも応用できるものではないかと僕は信じています。だから、最終的にはユダヤに限らず、マイノリティ文学全体、あるいはマイノリティ文化の持つ普遍的な特徴を記述するために役に立つような研究ができるのではないかと考えています。

マイノリティを通してマジョリティがどう見られているかということも重要です。だから、マイノリティを理解するうえでまたマジョリティを理解するうえでもマイノリティ文学は重要だと思うんです。僕はその辺にディアスポラにおけるユダヤの文学をからめていきたいんですけども。そういう野心を持っています（笑）。

イスラエルへ行ったきっかけ

僕は昔から外国語を学ぶことが好きだったんです。東大に入ってから文学部の言語学というところに行って、理論言語学と同時にいるような言葉を学びました。ギリシャ語、ラテン語、サンスクリット語、アラビア語、ペルシャ語などを学んだんですけど、なぜかヘブライ語だけがすごく好きになってしまったんです。

当時の東大の言語の主流は、フィールドワークといって、実際にアジアとかアフリカの地に出て、そこの少数民族の、ひどい場合には話者が死んだらその言語が無くなってしまような言語を記述して、それをもとに言語を分析するというものでした。当時の教授たちの間では、文字を持ったメジャーな言語は東大の言語



学の研究対象ではないという風潮があったんです。ところが僕はユダヤ人が生み出してきた文学や文献といった文化的な遺産を無視して、ヘブライ語という言語の、純粋に言語学的な側面だけを分析することに違和感があったんです。ヘブライ語をやるんだったらそれをもとに

どんな文学が生み出されてきたかということも知りたかった。だけど当時は、そういうことを目的に言語学をやるのは不純であるという風に考えられていたわけです。それでもう日本でやることはないと思って、東大卒業後、ユダヤ学やヘブライ語研究の世界的中心である、エルサレムのヘブライ大学に行くことに決めました。

もう一つは、僕自身日本から出たかったっていうのがあります。というのは、東大に入ってからいろいろありまして、一時は退学しようと思ったんです。なんとか卒業はしたんですけど、世界に出て何かやってみたくったんです。そういう時にちょうどヘブライ語っていうのが入ってきたんで、これはもうイスラエルに行こうと。日本から逃げ出したいというのがあって、それがそこまで頑張らせたという面は否定できないと思います。

はみだし
すてーじ

はみだせない自分がある
⇒ほら、はみだした。

(生命・院 はじめ)
(最近のはみだしっばなし；編)

パレスチナ問題について —「主観性と謙虚さ」—

現代のパレスチナ問題は僕の研究対象ではないので、研究者としてではなく、あくまで一人の人間としてお話ししたいと思います。日本ではイスラエルとパレスチナの紛争では中立の立場であるわけで、その点はこういった問題を客観的に見るうえで重要だと思います。しかし、パレスチナ問題に関する、日本のテレビや新聞の意見を聞くと、そういう客観性の名の下で生み出されている言説が、時として全く無知に基づくものであったり、軽率で責任感の無い発言であることがしばしばある、という印象を受けます。実際に今人が殺されているという状況に対してすごく軽率な意見を言う傲慢さみたいなものがあると思います。

僕自身は10年間イスラエルの側にいて、個人的に深くイスラエル人も付き合いきましたから、客観性を持ってこの問題を語ることは

きないとは思っています。しかし、その一方で、こういう主観性を持っているからこそ、この問題を客観性という名において簡単に、軽率に分析したくないという謙虚さがあるんですよ。その謙虚さって大事だと思うんです。

だからって僕は、実際にパレスチナやイスラエルの土地に行ったことが無い人間は黙れ、とかいうことを言ってるんじゃないんですよ。だけど、もし行ったことが無いならば、少なくとも何か謙虚さを持ってほしいですね。イスラエルでテロがあった時に日本のテレビや言説では、「これはユダヤ人が仕掛けた作戦だ」とかいうことを平気で言う人がいっぱいいるわけです。政治レベルではそういう風に分析して行くわけですけど、それがあまりにもそこに住んでる人たちの気持ちからかけ離れてるなあっていうのは常に思っていました。

イスラエルと日本の違い —真理の前での平等—

イスラエルでは教える側と教えられる側の垣根がないです。神というか、真理の前にはみんな平等だという意識が根本的にはあるような気がします。だから教授であろうが学部生であろうが、本当にお互いよく話し、生徒のほうが正しいことを言ったら教授はすぐ認めてその通りだと受け入れてくれるし、教授であるという地位ゆえの圧迫感とかは全く無いですね。僕みたいな日本から来た若い学生でも、指導教官の先生も、同じヘブライ文学をやっている研究者として、自由にずっと話してきましたよ。授業も、全然違います。日本だと学生が理解できないのが悪いみたいなどころがありますけど、イスラエルは全く逆で、先生が分かるように説明しないのが悪いんです。学生は当然のように、もう一回説明しろ、と言って、先生は自分が悪かったという風にして説明し直す。先生には分らせる義務があるんですよ。

大学以外では、弱者に対する社会の態度が違いますね。僕の長男が超重度の障害児なんですけど、生後3週間くらいで病気で一時死にそうになったんです。イスラエルでは本当に良くしてもらって、集中治療室に入っても、僕は一銭も払わずに良かったんですよ。イスラエル人であろうがなかろうが、僕のような外国人に対してさえ、救急の場合はタダなんです。その後も、リハビリや障害児用の施設も無料なんです。弱い者を救うのは当然だという意識が、社会自体に本当に根付いて

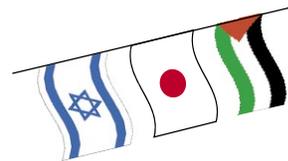
ますね。他にも、バス乗り場などの公共交通施設でも弱者に対してとても親切な環境でした。日本に帰ってきたら全く逆で、長男の居場所を見つけるのが本当に大変なんです。理由は、障害が重すぎる、こんなに重い世話する場所が無いって言うんです。ここは僕の国なのにです。イスラエルでは障害が重ければ重いほど手当をしてもらえ、日本では障害が重ければ重いほど手当をもらえなくなる。大きな違いだと思いますね。

京大生にメッセージ

海外に出てほしいですね。旅行だけじゃなくて、社会に入り込むような形で出てほしい。単に物理的にいるんじゃないで、社会の中である程度の立場を持つぐらいのレベルまで入り込んで、自分がそこでどれだけ重要性があるかって感じられることに意味があると思うんです。どこでもいいですから。とにかく海外に出てもっと視野を広げてほしいです。

それから、研究テーマを選ぶときなんですけど、何を選ぶかっていうことはあまり重要じゃないような気がするんですよ。何か1つ選んだらそれに向かって頑張っていく過程のほうが重要なのであって、何でもいってことはないけど、これかな、と思ったらとりあえずそれをやって、突き進んで行ってほしい。今の段階で自分のやりたいものを探すだけに明け暮れて、というふうにしてほしくないと思います。これは結婚も同じですね、一番自分にぴったりの人を探してたらそれこそ時間があっても足りない、死んじゃいますよ(笑)。選ぶことに悩んで何もできないのがいちばん悲惨だと思うんですよ。大学とか授業の枠組みでの研究テーマにこだわらないで、単位取ったり試験を受けたりするということは別に、もっと積極的に何か自分のテーマを探していったほうがいいですね。それこそ授業に出なくても、自分のテーマを探している方が絶対いいですよ。

— ありがとうございます。



編集部より

勝又先生にインタビューしたいと思ったきっかけは、先生の授業を取ったことでした。ヘブライ語・ヘブライ文学というのは、今まで自分にとってほとんど縁のないものでした。しかし授業でいきいきと話される先生の姿は印象的で、イスラエルに留学されていたということも興味深く、ぜひお話を伺ってみたいと思ったのです。

インタビューでも、先生はいきいきと話され、質問の答えも丁寧に準備をして答えてくださいました。インタビューでは、先生の研究テーマや、留学中のことについて聞くことができました。

研究のお話では、講義とは違って、なぜこのテーマを選んだか、どんなことを考えて研究をしているのか、といった研究に対する熱い思いを話してくださり、授業の理解も深まったような気がします。

大学卒業後、イスラエルへ留学を決めた行動力はすごいと思いました。全体を通して先生のお話から感じたのは、視野の広さです。大学や国という枠にこだわらないで、自分のやりたいことを追求する姿勢がとても魅力的でした。

はみだし
すてーじ

京都を去る前に、最後に、このステージに上がりたいです。
⇒京都を離れても投稿し続けてください。

(農・院 あつあげくん)
(約束ですよ；編)